



心友は人生の宝だよ

その 1、空手部の後輩山口君に 60 年ぶりに会う

2月24日に、大学の空手部の1年後輩の山口昌行君（浜松市在住）から長い手紙が届いた。山口君の年賀状に、空手の寒稽古を思い出して懐かしくなり、1月21日に少し長い手紙を書いた。その返信の内容の手紙だったが、その最後に「一度お会いしたいね」とあった。日が経つにつれて、段々と会いたい思いが募^つってきた。そんな折、掛川の榛葉君から、「川村君に会いに来て下さるとのこと、彼も喜んでくれると思います。日程が決まりましたらお知らせ下さい」とのハガキが3月9日に届いた。浜松と掛川は近いじゃないか。昼前に浜松へ着いて、山口君と会って、夕方掛川へ行けばいい。いい考えだと自画自賛。4月22日（水）浜松着11時53分、浜松発15時29分、掛川着15時56分着で行く旨、山口君と榛葉君に3月16日に手紙を出した。「お手紙拝見しました。4月22日（水）は60年ぶりになるので楽しみにしています」と、3月26日に返事のハガキが届いた。



浜松へ予定通りに着いた。下車してわくわくしながら改札口へ向かった。60年ぶりか、分かるかな、と長い階段の上から下の改札口を見ると、手を振っている男が一人居る。山口君のようだ。上から私が手を振ると両手を振り出したので、私も両手を振って応えてから、いそいそと階段を下りた。

「60年ぶりだけど直ぐ分かりましたよ。昼食は直ぐそこ、駅前で予約してあります。行きましょう」山口君も、いそいそと私に話しかけてきた。私はと言えば、昨日稽古して今日会ったような感じだった。60年が1日に縮まっていた。そして返事をした。

「造作かけて済まんのう。60年ぶりか。夢のようじゃ。会えてほんまに嬉

しい。ありがとう」

直ぐ近く、駅前の創業明治43年とある「うなぎ八百徳」に入った。入って右角の2人用席、予約の札が立っていた。着席すると直ぐに鰻重を持って来てくれた。浜松を実感した。鰻重、何年ぶりだろう？じっと見つめた。器がとても大きい。その上、お茶碗とお茶の入った急須、刻んだねぎとワサビが付いている。これは？と見ていると、山口君が、「最後はお茶碗に一杯、ねぎとワサビでお茶漬けで食べるんです」と説明してくれる。



さすがは浜松だとその説明に納得した。

お茶碗によそって早速食べ始めた。まずは鰻の大きいのご飯の多いのにびっくり、その旨いことに更にびっくり、最後に生まれて初めて鰻重のワサビ入りお茶漬けを食べた。その旨いこと、初めて食べる味に更に改めてびっくりした。

食べ終わってからも、暫くその場で話をして過ごした。この60年間の山口君の活躍を聞いて彼は人生を謳歌してきたんだと実感した。教師になって3年目か4年目に、彼が勤めていた盤田農業高校へ訪ねて行った記憶が甦ってきた。放課後だった。野球のノックをしていた。彼は農業機械や測量担当の農業科の教師だった。数多くの難しい資格を取得して活躍されていたようだ。故障したディーゼルエンジンを修復された話には正直びっくりした。イギリスやフランスなど、ヨーロッパ諸国に何度も行っているとのこと。英語の力も相当なものようだ。何と言っても凄いのは、将棋の3段の資格を持っていることだろう。各種大会で優勝されている。私も碁を強くなりたくと努力し、多くの方と碁を打って楽しんだから山口君の気持ちがよく分かる。

最後は自然と空手の話になる。彼とは自由組手の稽古をよくやった。私が3年の後期には、2年生であった山口君は私を超えていた（私より強くなっていた）記憶がある。その話をしたら、彼は、「3年、4年の2年間、公式戦、

負けなし、全勝だよ。4年時の関東大会で東京教育大学が優勝したんだよ」と言われた。その時のメンバー、4年山口、阿倍、内田、3年松永、森田、古牧、・・・とすらすらと話した。7人目を聞きそびれた。その6人とは私もよく稽古をしたので話が弾んだ。「内田は入部遅かったよなあ。ワシも1年の10月に入ったから、内田の遅かったのは憶えているよ」と言えば、「稽古熱心だった。あの長い足の威力は凄かったよ」と山口君が応じてくる。内田君、あの世でこの会話聞いてくれているのかなあ、とふと思う。



うなぎ八百徳を出て若き頃の徳川家康の浜松城見学後、駅前の喫茶でコーヒーを飲み、浜松駅へ。そこで国分寺の娘と我が家へ春華堂「うなぎパイ」のお土産まで頂く。散財かけたなあ。ありがとう。

改札口に入る。振り返り手を振って別れる。「会うは別れの始めなり」なんていう言葉があったのかなあと思いつつ、「一度お会いしたいね」と手紙の最後の最後へよくぞ書いてくれたと心の中で、山口君にお礼を述べたのだった。

「その2 変則OSK10第10回友情旅行、その3 ささやかなクラス会」へ続く。 (令和8年5月1日)

その2、OSK10第10回友情旅行

平成27年に榛葉君（S）の提案で、川村君（K）と小野（O）の三人で10回を目標に始めたOSK10友情旅行、令和6年川村君が体調を崩し心臓の手術を2回したため最後の10回目を実施出来ずに2年間は空しく過ぎた。

正月に「川村君、歩行訓練を始めたそうだよ」と榛葉君から吉報が届いた。

「川村君に会いたくて、もう我慢も限界だ。暖かくなったら会いに行きたい。焼津まで連れて行ってくれ」と、掛川の榛葉君へ2月3日に手紙を書いた。「4月に川村君に会いに来て下さるとのこと、彼も喜んでくれると思います。日程が決まりましたらお知らせください」と榛葉君から3月9日にハガキが届いた。「4月22日夕方、掛川へ行く。泊めてもらって、翌日23日川村君の家へ連れて行ってくれ」と、3月16日にハガキを出した。



私は耳がとても遠くなり、電話は聞き取れない。マイクを通した声はダメ。テレビは字幕。連絡はハガキか手紙しかない。まあそんな86歳の老人です。

4月22日、15時56分掛川着。榛葉君が「風呂に入ってから帰るから」と言われる。外風呂へ入って周囲の景色を見て、「おお、ここは前にも来たなあ」と思い出す。上がって体重を測ったら、榛葉君60.0kg、私は60.2kg。2人は顔を見合わせ笑い合った。夕方、榛葉君の家へ。学生の時に始めて何回泊めてもらったことか。10回は優に超えているだろう。奥様が笑顔で迎えてくれる。ほっこりとした気持ちになる。娘さんが見えて、榛葉君と奥様、それに私が加わって4人で晩ご飯を頂く。話は途切れることなく延々と続く。もう10時を過ぎたのかなあと時計を見ると12時10分前だった。よく喋ったものだとはびっくりした。静かな場所で補聴器を付け、相手の口元を見れば、ほぼ分かるので本当に楽しい時を過ごすことができた。

朝7時、ぱっちり眼が開いた。疲れは全く無い。有難いことだ。洗面を終えて外へ出た。これ程の広い庭をこれ程に手入れするとは、心底恐れ入る。自分も自宅の庭を自分で手入れしているが、榛葉君には遠く及ばないなあと自覚する。間無しに榛葉君が出て来て色々説明してくれる。古木を大事にされているのに敬服する。とても楽しい朝の一時だった。9時半過ぎに、焼津の川村君の家へ向かって出発した。途中、高速道路も走った。かなり遠いなあ、何キロあるのだろう。聞けば良かったと少し悔やむ。

多分11時頃だったろう。川村君の家へ到着した。大きなキャンピングカーがある。広い庭だなあ。手入れは余りされていない。川村君は体調を崩し、手入れが出来なくてさぞかし悔しいことだろう。その無念さが分かる。息子さんの案内で玄関を入ると、川村君が畳の上を杖をついて出て来た。2年ぶりの顔、予想していたよりも遥かに元気そうな顔を見て、ほっとして会いに来て良かったと、胸がきゅーんとなった。



応接セットに川村君に向かい合って、榛葉君と私は並んで座って暫く話をした。話しぶりも2年前とちっとも変わらない。お会いした嬉しさに興奮していたのか、何を話したかは殆ど覚えていない。息子さんに昼ご飯を予約しているので、川村君を乗せて先導してくれると言われる。30分近く走っただろうか。落ち着いた雰囲気のお店だった。

部屋へ通され、榛葉君と私が横に並んで、川村君と向き合って座った。話しながらゆっくりと食べた。御馳走を前にして、食べている物は月とすっぽんなのに、何故か駒場寮の食堂で昼のうどんを3人がこうして向き合って座って食べたのを思い出していた。そして訊いた。「川村君、結核で入院したのは卒業して何年目ぞ」、「2年目に入った矢先だった」。浜松済生会病院へ行った話をした。新幹線も瀬戸大橋も無かった時代、病院で毛布を借りて、川村君のベッドの下で一晩寝させてもらって、明るく朝帰ったなあ、と話し

た。63年前はそんな時代、今ではとても考えられない。川村君は全部平らげた。榛葉君も私も全部平らげた。私は満腹だった。川村君、これなら元気になる、「間違いなし」と確信した。友情旅行の延長戦も可能かもと思ったりした。そんなことを考えていると鼻の奥がつーんとなった。

「川村さん、息子さんが迎えに来られました」と店の方に告げられ、3人は席を立て外へ出た。私と握手をして息子さんの車に乗った川村君に、「また会おう」と言おうとして、「また」と言った途端に涙が吹き出して来て、「会おう」は言葉にならず、彼の顔も涙でよく見えなかった。

川村君と別れ、私は榛葉君に焼津駅まで送ってもらった。そして一路東京へ向かった。国分寺の娘の所へは5時過ぎに着いた。



※「その3 ささやかなクラス会」へ続く

(令和8年5月1日)